

青丘文庫研究会 月報

No.263
2012年9月1日

青丘文庫研究会 〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1 (財)神戸学生青年センター内
TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878 <http://ksyc.jp/sb/> e-mail hida@ksyc.jp
①在日朝鮮人運動史研究会関西部会 (代表・飛田雄一)
②朝鮮近現代史研究会 (代表・水野直樹)
郵便振替<00970-0-68837 青丘文庫月報>年間購読料 3000円
※ 他に、青丘文庫に寄付する図書の購入費として 2000円／年をお願いします。

<巻頭エッセイ>

みなさん、残暑お見舞い申し上げます。ウトロからの近況報告です。**斎藤正樹**

去る8月13日夜から14日早朝にかけて、京都府南部を襲った集中豪雨（雨量300ミリ）は、宇治市で死者1名、行方不明1名、家屋の全壊・半壊約30戸、床上浸水約500戸、床下浸水約1400戸という大きな被害を出しました。朝鮮人集落・ウトロ地域（約60世帯）では人的被害はなかったものの、床上浸水10戸、床下40戸。宇治市の他の地域の被害が甚大で、それほど目立ちませんでしたが、ウトロでも近年にない大きな被害でした。ウトロを守る会はカンパを集めました。半月たって、地域は静穏を取り戻しましたが、今回の被害で特徴的なことは、住民の中で立場の弱い人に被害が集中したということです。

ウトロ地区の歴史を象徴する「朝鮮人労働者飯場」跡の近くのバーラックに住むJさん（91歳女性、一人暮らし）は、後妻として来られ、30年ほど前に夫を亡くした後もそのまま住み続けました。屋根はトタンで錆つき、床も低く、飲み水は井戸を利用し、毎年水害に悩まされました。真夏の室温は40度近くにもなるため、家の中にはいられず、冷房のあるスーパーに行って過ごすのが日課でした。しかし、最近、足と腰を痛めて歩けなくなり、介護用ベッドとポータブル・トイレが彼女の行動範囲でした。あの豪雨の日、浸水は床上まで上がり、ベッドの上だけが島のようになつたと言います。災害の3日後、彼女は地域の中にあるデイサービスの長椅子で横になっていました。彼女は私の手を握って離しません。「私はどうなるのか。もうあの家には住めない。空家を貸してくれと言ったが断られた。」小さな声です。周りの高齢者の仲間たちが、「この人は元気だったが、こうなったんだよ」と口を挟んでいます。

家事ヘルパーを使い、同じ地域に住む家族が面倒を見てきましたが、これにも限界があります。災害のショックもあって体力の低下は否めません。数日後、本人と家族、関係者が集まって相談し、とりあえず近くの療養型病院に入院となりました。バーラックの中は床の上まで消毒薬を撒いたものの、床を歩くと抜けそうです。問題は数カ月後の退院時、居住の場所です。ケースワーカーの処遇方針は施設入所。それもすぐに空きがあるわけないでしょう。では、ウトロに帰れたとしてどこに住むのか、どのように在宅生活を支えるのか、・・・、関係者の誰も言いだしませんでしたが、最悪の受け皿は「社会的入院」です。（つまり、生きて出てこられない場所のこと。）

私たちは被災者の救済と共に、近い将来を考えました。①、仮設住宅（例えば、移動式コンテナハウスなど）を地域内に設置し、被災者を含め住宅を失うか、あるいは居住環境の劣悪な住民（例

えば、高齢者一人暮らしなど)に提供して、ウトロ住環境整備事業によって公的住宅が建設されるまでの期間、新たな住宅供給システムを作る取り組みをしてはどうか、と。これに対し住民からは、②、地区内の空家の中から比較的程度のよいものを借り上げて、住宅困窮者に貸してはどうか。勿論、修理は必要だが、新たに作るよりは安い……。おそらく両者を組み合わせた方策の実現を追求していくことになるでしょう。

そう、このまま何もしなければ、水害被害や家屋老朽化、住民の一層の高齢化が進み、住民の数は減って、あたかも限界集落の様相に近づくからです。

「私は「ウトロのオモニ」だから、みんな私だと知っているから……、どこかよそではこうはいかないよ。このまちを離したら、私は私でなくなる」(われら、住んでたたかうウトロ団結集会参加者一同、2002年)。ウトロの入口に掲げられた看板の一節です。

個別のケースと全体のコミュニティの問題の両方を同時に考えながら(これが結構難しい)、住民は個別の利害でなく、地域の最も立場の弱い人のことを考えて(これは至難の業です)、全体が前に向かっていく底力を集めることです。既存の居住資源を分かれ合い、あるいは新たなものを一時的につくって、行政と協議しながら、公的住宅の完成まで、そろってゴールに向かう。いま必要なのはその手だけです。ウトロに住み続けられる居住福祉の戦略が、改めて問われていると言えるのではないでしょうか。

第334回在日朝鮮人運動史研究会関西部会(2012年6月10日)

金時鐘の未刊行詩集

「日本風土記II」についてー「在日」という場に息づく人々の表情ー 浅見洋子



金時鐘の詩集に、未刊行のまま原稿も散逸してしまった幻の第3詩集、『日本風土記II』がある。この詩集は、1950年代後半から1960年頃にかけて書かれた詩を中心に編まれ、飯塚書店から出版される予定だったが、共和国の朝鮮作家同盟及び左派在日朝鮮人運動組織の激しい批判により、組版の段階まで進みながらも刊行を断念せざるをえなかつたのである。だが最近では、かろうじて残されていた「目次の控え」を手がかりにして、『日本風土記II』の復元が進められている。それにより全29篇中20篇を読むことができるようになり、大まかにではあるが、『日本風土記II』の全体像が知られるようになった。

この詩集では、それまでになく金時鐘が自身の来歴を吐露しているのが印象的である。その意味では『日本風土記II』は、金時鐘の個人史的色彩の強い『長篇詩集 新潟』の前哨的な詩集であったといえる(両詩集が書かれた時期もほぼ同じである)。だが『日本風土記II』には、後の『猪飼野詩集』へつながるような詩篇も数多く収録されている。そこには、「在日」という場に息づく人々が、非常に豊かな表情で描かれているのだ。例えば、ヤミ商売に従事する一世の女性との心の交流を描いた「海の飢餓」、底辺労働の現場から反共同盟の不条理を問うた「労働昇天」、くず拾いで生計を立てる親子のユーモラスな物語「しゃりっこ」、帰国者大会に向かう一世の人生を浮き彫りにした「道(洪じいさん)」などである。どの詩篇も魅力的だが、紙幅が限られているため、ここでは一篇を選んでご紹介したい。

「海の飢餓」は、満員電車を舞台にした作品である。立場も考えていることもばらばらの他人同士が、一定の時間、同じ場を共有するという劇的な空間だ。そのような空間で、ヤミ米を背負った在日一世の女性「あなた」と、「同族同志」である「ぼく」との「出会い」とすれ違いのドラマが展開していくのである。

ホームに着く度に乗客が押し出されたり車内に押し入れられたりする満員電車は、「大都会の/

消化器(ママ)管」に喩えられている。ここで、日本人と見分けのつかない「ぼく」は「吸いこまれる側」として、朝鮮人の位相が刻まれた「あなた」は「吐きだされる側」として、「ぼく」と「あなた」は「対置」されてしまうのである。ここには、無意識レベルにまで至る日本人の朝鮮人に対する排除、そして「同族」でありながらも手放しにはつながり合えない在日の断絶が示されていく。

「あなた」は人の波に押し出されながらも、その度ごとに果敢に車内に戻ってみせる。だが、「あなた」の必死の抵抗にもかかわらず、ついに「あなた」は電車の外にはじき出され、大切な荷物を車内に残したまま、ホームに取り残されることになるのである。無情にも閉まった扉にすがり、「あなた」は「“かえせーかえせー”」と大声で叫ぶのだが、この叫びは、植民地期から解放後に至るまで、あらゆるものを奪われ通した者の突き上げるような叫びとしても響いている。その光景を前に

「ぼく」は手をさしのべることもできず、「加害者に組した無力な目撃者」となるほかないのである。車内に散乱する「白米」や「ゴム長」に対し、「ぼく」は「さあ、これがぼくの臓物だ。」と乗客に向かって呼びかけてみる。しかし、その「あなた」と「ぼく」の「同族同志」としての絆は、押し合う乗客によって「ぐたぐたに踏みつけられ」ことになるのである。そして「あなた」が車外に吐き出されたあと、「ぼく」はこの満員電車のなかで自分ひとりが朝鮮人であるという恐怖に耐え、「ぼくは誰に、何を、なんと叫べばいいのか？！」と胸の内で叫ぶ。

この詩には、日本社会でマイノリティーとして生きる在日朝鮮人の鬱屈した心情が、あらゆる位相で描きこまれていよう。その苦しさが極限に達したところで、場面は突然展開し、パノラマのように視界が開かれるのである。

俊足のディゼル・カーをもってしても／電車が海をつっきったというニュースを／ぼくはまだ聞かない。／ただ どろんこの飢餓がゆめみる／茫洋たる発芽が／車窓をよぎってぐんぐんひろがつてゆくのだ。／これはまさしく／海だ。

これは、窗外に海が広がる情景の描写であるとともに、それが祖国へつながる海にほかならないという「ぼく」の確信でもあろう。「俊足のディゼル・カー」の威力をもってしても、いまだ海に道を通すことはできていない。ただ、極点に達した「どろんこの飢餓」だけが、あの場所へ行きつきたいという強い想像力をもって、海そのものを道としてぐんぐん広げていくことができるのだ。

『日本風土記Ⅱ』には、非常に厳しい暮らしのなかで、在日の人々が思い描く様々な“夢”や“願い”が描き込まれている。たとえ今が苦しくても、いつかきっと、という思いがある限り、それを支えにして人間は生きていける。そんな金時鐘の強い意志と、人間の生きる力への信頼が、これらの詩篇からはひしひしと感じられるのだ。どんなに歪つであろうと、そこに生活があるならば、それがその人にとってのかけがえのない生きる場である。今ここを生きる人々の豊かな表情をとらえること、それが「在日」を自らの足場として主張した詩人・金時鐘の使命だったのではないだろうか。

●天皇制を考える講演会

日時：2012年11月23日(金)午後2時から

会場：神戸学生青年センター／講師：裴 富吉（ペエ・ブキル）さん

参加費：1000円

共催：はんてんの会、神戸学生青年センター

朝鮮史セミナー2012秋

- 1) 11月8日(木) 午後7時
『ひょうごの古代朝鮮文化—猪名川流域から明石川流域—』
講師：寺岡洋さん（むくげの会会員）
- 2) 11月22日(木) 午後7時
『鉄路に響く鉄道工夫アリラン—山陰線工事と朝鮮人労働者—』
講師：徐根植さん（兵庫朝鮮関係研究会代表）
- 3) 12月6日(木) 午後7時
『韓流ブームの源流と神戸』
講師：高祐二さん（兵庫朝鮮関係研究会会員）
・参加費、各600円
・会場・主催はいずれも神戸学生青年センター



●青丘文庫研究会のご案内●

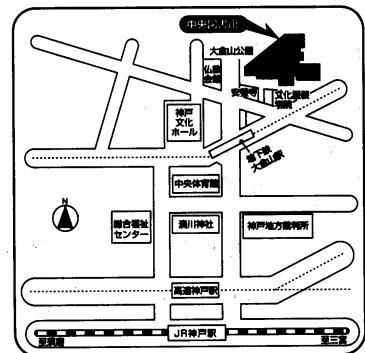
■第284回朝鮮近現代史研究会

2012年9月9日(日) 午後3～5時

「上海租界の朝鮮人像」 鈴木常勝

■在日朝鮮人運動史研究会関西部会は、お休みです。

※会場 神戸市立中央図書館内 青丘文庫 TEL 078-371-3351



【今後の研究会の予定】

10月14日(日) 在日(宋基燦)、近現代史(未定)。研究会は基本的に毎月第2日曜日午後1～5時に開きます。報告希望者は、飛田または水野までご連絡ください。

【月報の巻頭エッセイの予定】

10月号以降は、本岡拓哉、高野昭雄、李景珉、李裕淑、小野容照、梶居佳広、中川健一、黒川伊織、砂上昌一、三宅美千子、佐野通夫、吉川絢子、安致源、伊地知紀子、太田修、高正子、坂本悠一、全淑美、足立龍枝、渡辺さえ、池貞姫、張允植、横山篤夫、松田利彦、西村寿美子、玄善允、川口祥子。よろしくお願ひします。締め切りは前月の10日です。

【編集後記】

- ・ 今夏の暑さはことのほか厳しいですね。みなさんいかがお過ごしでしょうか。9月になつてもまだ秋の気配が感じられません。いちおう、読書の秋、勉学の秋ですね・・・。青丘文庫研究会もぼちぼちやっていきたいと思います。(前号の月報、号数、発行日がまちがっていました。失礼しました。ホームページは訂正しています。) 飛田雄一 hida@ksyc.jp